
仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークロツカー〈始まりの物語〉

【Nコード】

N0459Z

【作者名】

sinne - キヨノリ

【あらすじ】

この世界は、平和な筈だった。ある日突然、不思議な者達とその平和な筈だった世界を脅かす。其処に現れたのは、クロツカスと時計を模した仮面ライダークロツカー。*これは仮面ライダーを基にした全オ리지ナル小説です。苦手な方はすぐに逃げたほうが良いです。

1話「出会い、始まり、青年の変身」(前書き)

ララ「前書きとあとがきだけで登場します！鈴海ララです」

ルル「同じく鈴海ルル」

ララ「じゃ、今回は完全オリジナルだよ！」

ルル「他のsinne執筆小説に特別ゲストとして出てくるらしい」

1話「出会い、始まり、青年の変身」

「は〜」

青年が居た。

青年の名前は下樹雪人^{しもぎゆきひと}。

フラワーチーム

F・Tという花屋で働く青年だ。

彼が溜息をついてる理由は、今月の食費諸々についてだった。

「何で、こんな風になるんだ〜……。俺って、結構金遣い荒かったっけな〜」

自分の所持金を見てもう一度溜息をつく雪人。

「バイト……。増やそうかな……。」

仕事をすでに結構している雪人にとっては、もう自分の為に使う時間は少なくなつて来ている。

それでも自分の生活費だけは稼がなければいけない。

「あ、雪人く〜ん!」

「あ、蕾さん」

彼女は蕾花苗^{つぼみかなえ}。F・Tの若き店長である。

「だから、雪人君。花苗って呼んでって言ったでしょ。で、どうしたの?こんな所で呆然として」

「いや〜。生活費が厳しくなって・・・」

「また！？雪人君は、金遣いが荒いのよ。もう。はい」

「え？」

花苗は雪人に手を差し出した。

「今日くらいは私が奢ってあげる。結構お世話になってるしね」

「・・・ありがとな〜！！蕾さん！」

「だから花苗って呼んで！」

「はいはい」

「はあ・・・はあ・・・」

少年が走っていた。

「見つけた。こっちに来い！」

「誰だ・・・」

「覚えてないのか。なら、力づくで捕まえるしかないか」

「はあ・・・はあ・・・」

少年は、追ってくる者に追いつかれないよう、全力で走る。

「あゝ、良かったあ、もう、本当に今月ピンチだったんだよ。ありがとな、蕾さん」

「だから、花苗って呼んでって言うてるでしょ。じゃあね。雪人君
そう言っつて、花苗は帰って行った。

「ふう。良かった良かった。ん？」

雪人はあるモノを見つけた。

「君は・・・」

それは、少年だった。
ポロポロな布にくるまってブルブル震えている。

「どうしたんだ？君は」

「ぼくは、クキル。お兄ちゃんは？」

「俺は下樹雪人。で、どうして此处でこんな事してるんだ？」

雪人はクキルと名乗った少年に尋ねる。

「ぼくは、何でだろう？何だか、追われてるみたいなんだ。ねえ、雪人お兄ちゃん。ぼくを連れてってくれる？」

自分がよく分かってないように言うクキルに対し、雪人は

「分かった。でも、俺に着いてきてもあまり養えないぞ?」

「どうでもいい。ただ、あいつらから守ってくれれば良いから」

「分かった。じゃ、付いて来な」

「うん」

雪人はクキルを連れて家に帰る。

「これが、クロツカーの資格者・・・」

クキルは、雪人に気付かれない様に呟いた。

その近くでは、不思議な少女と少年が居た。

「ねえ、アレク。あれが、クキルなの?」

「そうらしいわ・・・。コトト。もう少し、彼を偵察してみるわ。
それと、あの雪人という青年についても」

「分かった」

「ねえ、雪人お兄ちゃん」

「何だ？あと、俺の事は雪人って呼んでくれ、何だか変な感じがするって言うか、悲しくなるんだ」

「……うん、分かった。雪人。ねえ、此処が、雪人の家？」

「ああ、クキル」

「何？」

雪人はクキルに訊く。

「本当に俺でよかったのか？」

「うん。雪人じゃないと駄目だから」

クキルは、雪人に妙な執着を持っている。
それは出会ったときから既に分かる。

その時

「うつつ！」

「どうした、クキル」

「何だか……西の方向から、悪寒がする。何か、怪物が暴れているみたいだ！」

「怪物……」

いきなり苦しみだしたクキルに、雪人は疑問に思う。

「雪人・・・付いてきて！」

「え？あ、ああ？」

クキルは突然雪人の手を握ったかと思うと、雪人の手を引いて走って行った。

「ふふふ・・・。丁度良かったわね」

「モノの破壊衝動を吸い取り、何かを怪物にする。これは、ブレイクモンスターとでも言っておく？アレク」

「そうね」

先程の少年と少女が石の怪物を引き連れている。

「あら、そちらから来てくれたようね」

其処には、クキルと雪人が居た。

「クキル、一体何なんだ」

「雪人。これを使って！」

クキルが雪人に渡したのは時計。クロツカスの紋様が彫られている。

「それは！」

少女・・・アレクが驚いたように言う。

「これは、何だ？」

「クロックベルト。これでクロッカーに変身して！」

「・・・」

「お願い！」

必死で言うクキルに雪人は心を打たれ、受け取っていた。

「分かった。必死に言う願い事は、叶えてやらなきゃな。じゃ、行くぞ」

雪人は、クロックベルトの鎖を腰に巻きつける。

そして、時計部分を開けて言った。

「変身」

其処には、クロッカスと時計を模した者に変身していた。

「仮面ライダークロッカー。か」

アレクは、そう言い放った。

「成る程、なら、行かせて貰う！」

続く

1話「出会い、始まり、青年の変身」(後書き)

てわけで、またはじめてしまった・・・。

何だか次々とはじめてしまう・・・。

もうそろそろ何か終わらせなきゃ？(全部大して進んでない)

2話「クキル、雪人、青年の初陣」(前書き)

カズマ「今回のあらすじは俺達です」

シンジ「何で・・・？」

カズマ「まあ良いだろ、これの本編ではまず出ないんだしさ」

シンジ「ま、いつか。前回の出来事」

カズマ「

青年、下樹^{しもぎゆき}雪人は生活費に困る普通の花屋店員。

ある日、勤務先の店長との食事の後、クキルという少年と出会う。

そして、悪寒がすると言ったクキルに、雪人は付いていった。

そしたら、ブレイクモンスターという怪物が暴れていた。

雪人は、クキルに渡されたクロツクベルトを使って変身。

仮面ライダークロツカス・・・じゃなくて、仮面ライダークロツカ

ーになった！

」

シンジ「カズマ・・・」

カズマ「いや・・・つい、な」

2話「クキル、雪人、青年の初陣」

「仮面ライダークロツカーか・・・」

少女は言い放った。

其処に立っているのは、クロツカスと時計を思わせるデザインの仮面ライダー。

「クロツカスカ、俺の好きな花だな・・・。まあいい、まずは、其処に怪物を倒すんだろ、クキル」

「うん、雪人^{ゆきこ}」

「よし、じゃあ、行くぞ！」

雪人・・・クロツカーはチェーンソーを思わせる怪物へ立ち向かって行った。

「それにしても、チェーンソーなんて、物騒なもんだな」

雪人は、軽々とブレイクモンスターを振り回す。

「何だアイツ！」

少女は言う。

「アレク、だつたっけ？雪人には、これまでに居ないほどのクロツカーの資質を持っている。僕には、すぐに分かったんだ」

「……………」

アレクと呼ばれた少女は、今までに無い苛立ちを見せている。
隣に居た少年……コトトは、アレクに

「アレク、今の僕達に勝ち目ないよ、早く行こう」

「……………悔しいけど、私達にクロツカーに立ち向かう程の力は無いわ、コトト。行きましよう」

「うん」

そう言って、二人は姿を消した。

「くそっ！あいつら敵前逃亡か！まあいい、俺の相手はこっちだろ
うー！」

クロツカーは叫びながらチェーンソーのブレイクモンスターと戦っている。

「何か武器は無いのか!」

「武器……。あ、ベルトの横にある剣、そのボタンを押して!」

「分かった!」

クロツカーはクキルの言うとおりにする。

「そしたら、相手に降り下ろして!」

クロツカーはブレイクモンスターに剣を振り下ろす。

「えいやああああああああああああっ！！！！」

その時、ブレイクモンスターは崩れ落ち、中から人が出てきた。

「……！これは……」

「雪人の知り合い？」

「ああ……桜木英樹^{さくらぎひでき}。俺の中学の知り合いだ」

何故、ブレイクモンスターの中に人が居たのだろうか？
雪人にはその疑問があった。

「なあ、クキル」

雪人は変身を解いてクキルに訊いた。

「何？雪人」

「あの、ブレイクモンスターって何だ？何故、中に人が……」

「……それについては、家に戻ってからにしよう」

「……ああ、コイツも、家に連れ帰るか」

「で、ブレイクモンスターって、何だ？」

此処は雪人の家。

英樹は、現在雪人の家の寝室で寝させている。

「ブレイクモンスター、つていうのは、人とかの破壊衝動を動かして人を怪物の仲に取り込む。周りのモノの破壊衝動も吸い取って、破壊だけをする人形なんだよ」

「そんなものが・・・」

「うん、それを作るのは、破壊者・・・まあ、僕はブレイカーって呼んでるけどね。その人達が、ブレイクモンスターを作ってるんだよ」

「なあ、何で、クキルは、其処まで知ってるんだ？」

雪人はクキルに訊いた。

「・・・分からない、僕、いつのまにか追われてて、いつのまにかクロツクベルトを持ってて、何故かその事を知ってた。でも、雪人と一緒に居れば、思い出せる気がしたんだ」

「・・・俺はな、昔空手、柔道、とか、そんな感じの格闘技やってたんだ」

「だから、結構戦闘が出来たんだ」

「まあ、な。でも、アイツ・・・雪良ゆきりょうが死んでから、やめたんだ。雪良が居たから、頑張っていた。アイツが居なくなつて、泣いて、泣いて、涙が枯れるまで泣いて、それで、英樹に救われたんだ。蕾

さんとか、F・Tの人達にな」

雪人が過去の話をするのは、クキルが初めてだった。

雪人は、今まで妹の事を思い出して悲しくなるから、とこの話をする事を拒み続けていた。

妹が居なくなつてから雪人には何も無い毎日があつた。

悲しみのどん底から雪人を助けたのは、桜木英樹と薔花苗だった。

「ふうん……。だから、”お兄ちゃん”って呼ばれなくなかったんだ」

「……ああ……」

雪人は、寝室に行った。

「英樹……」

「……雪人、此処は……」

「俺の家だ。お前、路上で倒れてたんだぞ」

雪人は、あえてあの事を言わず、倒れてたとだけ言った。

「そうなのか！？いや、それにしても、変な夢見たな」

「変な夢？」

雪人は英樹に訊いた。

「ああ、なんか、変な少女と少年が、俺に羽を投げつけて来たんだ。

そして、気が遠くなって怪物の中に閉じ込められて暴走してるって夢。ま、何か変な奴に止められたんだけどさ。何処から夢で、何処まで現実だったんだろうな。いや、全部夢か？」

「へえ、そんなの見る事もあるんだな」

雪人は反応を示さないように言う。

「それ、お前の悪い癖だな」

「は？」

「いや、何でもねーよ。世話になったな。じゃ」

「あ、ああ・・・」

雪人は、英樹を見送った。

英樹が帰った後、クキルは言った。

「あの英樹って人・・・雪人がクロッカーって知ってる・・・なんで？」

「アイツには、昔から変な才能あるんだよ。そのせいで虐められた事もあったんだ」

「ふうん」

続く

2話「クキル、雪人、青年の初陣」(後書き)

カズマ「2話も終わったな」
シンジ「な」

カズマ「これだけ・・・なのか？」
シンジ「らしいね」

3話「雪良、英樹、切なる願い」（前書き）

今回は過去の話とか、色々があるので戦闘ないです。

3話「雪良、英樹、切なる願い」

「……ねえ、雪人」

「どうしたんだ？」

英樹が帰った後、クキルは雪人に尋ねて来た。

「英樹って人、何か不思議な力持ってたの？」

「ああ、何だかな、超能力保持者だったんだ」

「超能力保持者？」

「稀に居るんだよ。あまり居ないし、アイツの力は強い方だったかな」

雪人は語る。悲しげな表情をしながら、クキルに語る。
その図は、まるで兄弟の様だった。

「そうだな、じゃあ、最初から話すか。英樹の事も、雪良の事も」

「うん」

それは、十数年前の事だった。

まだ小学校3年生だった俺は、転校して来た英樹に興味を持った。

「はじめまして、俺は桜木英樹。よろしく」

浮かないような、悲しげな、堅い表情の彼が教室に入ってきたとき、俺は驚愕した。

小学校3年生にしては、大人びていた事に、俺は驚いたのだ。最初こそは皆大歓迎した。

でも……

「何だよそれ！幽霊なんて居るはず無いだろ！」

「何でそれ知ってるんだよ！そ、それは誰にも言っていないことだったのに！」

「お前……何者なんだよ！化け物！」

「怪物！」「化け物！」

誰も知るはずの無い事を知っていたり、道端で誰かと話したり、感情が高ぶった時に周囲のものを浮かばせたり、普通の人間では出来ない事をアイツはしていた。

無論、人間は普通じゃない存在を否定し続ける。そんな存在だ。

自分達より強い何かがあると、怖い感じる心の弱い人間達は、彼の存在を否定した。

そう、先生までも、それを否定した。

「なあ、桜木」

「何だよ、お前も、俺を馬鹿にするのかよ」

「違う。俺はお前を馬鹿にするんじゃない。怖いとも思わない」

「じゃあ、何だよ」

「俺は、お前を信じる。お前も、俺を信じる」

「だから、何だ」

「だ〜か〜ら〜っ！俺とは友達になろうってさ」

英樹は、人を信じるのは、俺が初めてだと言っていた。

俺とは、ものすごく仲が良くなった。

俺と過ごして行く内に、英樹は超能力の抑え方とかを習得していった。

「なあ、雪人」

「何だ？英樹」

「俺さ、強くなりたいんだ。なあ、一緒に空手しないか？」

「ああ！いいぜ！」

英樹の、強くなりたいという願い。

それは、自分の強さがほしかったからだ。

超能力じゃなく、自分自身の強さがほしいって、彼が言っていた。

でも、悲劇は起こった。

雪良が死んだのだ。

「せ……雪良……」

「……………」

眠っている雪良に、俺は手を触れた。
冷たくなっている。

「……………」

「俺、部屋、出るよ」

「あ、ああ……………」

英樹は、俺が何も言わずとも、俺の心を読んで、部屋を出た。

「雪人……………」

その日以降、俺は空手を辞めた。

そして、ある日の事だった

「なあ、雪人」

「どうしたんだ？英樹……………」

「もうそろそろさ、卒業だから、仕事見つけようぜ！」

「そう……………か……………」

「ほらほら、君の憧れの蕾つぼみさんの経営する花屋で働こうぜ！店員募
集中だしさ」

「あ……ああ……」

それでも、俺は気が乗らなかった。とても大事なものがぽっかりと空いていた。

「ほら、雪人君！」

「蕾……さん……」

「何ボケーっとしてるの！私も誘ったじゃない。F・Tで働いてくれる？って」

「ごめんなさい……」

その時、蕾さんは俺の頬を叩いた。

「……!!」

「妹さん亡くして、気が落ちてるのもわかるけど、いつまでもウジウジしてちゃ、何も始まらないよ!!」

「蕾さん……。俺、何か、間違ってたみたいだな。ありがとな、蕾さん」

まだ、気持ちは落ちているけど、俺は、少し元気になれた。

「俺の話は、ここまでだ」

「それで、雪人は、F・Tに入ったの？」

「ああ」

雪人は、ぼおつと空を見ていた。

クキルも、つられるように外を見ていた。

続く

3話「雪良、英樹、切なる願い」(後書き)

ちなみに雪人の年齢は23歳。
蕾、桜木も同じ年齢。

ララ「ふえ〜」

4話「哀、恋、姉探しの少女」(前書き)

ララ「こにゃ」

ルル「今回の……あらすじは……僕達が……担当する……」

ララ「前は早くも主人公の過去暴露！これ、連載もつのかな……？」

ルル「仕方ない、作者はちまちまと長い話書くのは苦手だから」

ララ「ああ、そうそう。つい最初の方に普通は後の方で暴露する様な物を暴露したり」

ルル「で、今回の話は、ちまちまとした話になるらしい」

ララ「前回大きい話しちゃったから!？」

4話「哀、恋、姉探しの少女」

次の日

「雪人ゆきひと！朝だよ！」

「え？あ、ああ！！！」

クキルの声で雪人は目を覚ます。

「今何時だ！」

「今は・・・えと、10時！」

クキルの言葉に雪人はあせる。

「やべっ！開店時間だ！早く行かないと蓄たくみさんに怒られる！」

雪人の働いてるF・Tの開店時間は10時。
フラワーチーム

雪人の住んでる所から店までは10分かかるし、その前に、開店準備で30分前には行かなくてはならなかった。

「俺は今から店に行く！あと、明日からは8時には起こしてくれ！」

「分かった！雪人」

そう言って、雪人はバイクで急いで店に行った。

クキルはその光景を見て、「この人、本当に大丈夫かなあ・・・？」
と思いつけていた。

「で、雪人君。開店時間は何時だと思う？」

「10時・・・です・・・」

案の定、雪人は店長のつぼみかなえ薔花苗に怒られていた。

「今は、何時？」

「10時29分です」

「土下座、そしてシフトはもったときつめに、あと給料そのまま」

「ええ〜!？」

薔花苗の言葉に、雪人は愕然した。

「まあまあ、薔さんも、そこまで怒らなくなつて・・・」

「家は今、人手不足なの!はい、英樹君も早く仕事に戻つて!」

「・・・薔さん、すみません・・・」

「はいはい、もう分かったから、雪人君も仕事に戻つてよし!」

「はい!」

そう言つて、雪人は持ち場に行った。

ここ、F・Tは、少し広めの花屋さんだ。
様々な花を取り扱っている。季節に準じて花の種類は変わる。
なるべく自然な花を取り扱っているのだ。

「さて、今日も仕事仕事」

雪人はそう言っつて、段ボールの中からいくつか袋を出して、ケースに並べた。

「クロツカス・・・」

雪良、彼の妹の好きだった花。
彼も、その花を好きだった。

「来年、家にも植えようかな・・・」

そう思いながら、彼は仕事をしていた。

「私を信じてください・・・」

クキルには話さなかったが、英樹と友達になった時、雪人はクロツカスの球根を彼に渡した。

彼が来たのはクロツカスの咲く季節ではなかった為、球根を渡すという事になったが、その球根に込められた意味は、「私を信じてください」その意味だった。

クロツカスの花言葉はいくつかあるが、その中で、彼が英樹にあげる時に込めた意味はそれだった。

「雪良・・・」

一方、クキルは一人残された部屋で、何をすれば良いか迷っていた。

「とりあえず、これを使えば、ブレイカーのリーダーになるのは分かったんだけど・・・」

クキルは、ブレイカー等を探すリーダーを作っていた。

リーダーと言っても、念力のような物で探し、その方向を指すダウジングの様な物だった。

「問題なのは、雪人に連絡をとる方法なんだよね。雪人の働いてるお店の場所は僕も分からないし、着いていったら着いて行ったで雪人に怒られるんだよね・・・はあ・・・」

リーダーを作り終えたクキルは、何をすれば良いのか分からなかった為、外に出る事にした。

でも、外に出ればまたあいつ等に襲われるかもしれない・・・。そんな不安を感じながらも、クキルはドアを開いた。

「ふあゝ、やっぱり、外って良いよね」

雪人に貰っていた鍵で、ドアを閉める。

「もう、冬なんだ・・・」

クキルは、逃げるのに夢中で、季節とか年なんてどうでも良かった。それを、ゆっくり見ることが出来たのも、雪人のおかげだ。

「雪人に、感謝しないとね」

そう言いながら、クキルは歩いていった。

しばらく歩くと、道端で小さくなっている少女が居た。

クキルは、困っている人は放っておけない主義な為、ついその少女の所へ行ってしまった。

「君は？」

「私？私は……忘歌^{ぼつか}。音無^{おとなじ}、忘歌」

忘歌と名乗った少女は、クキルを怯える目で見ていた。

「こんな所で、何してるの？」

クキルは忘歌に尋ねた。

「私……忘歌ね、お姉ちゃんを待ってるの。哀歌お姉ちゃん」

そう言った忘歌は、疲れたような表情だった。

「いつから待ってるの？」

「そうだな、結構待ってる。でも、忘歌、お姉ちゃんの事は忘れてないんだ。この花に込められた意味を、理解できたから」

そう言って、忘歌はペンダントに彫られている勿忘草をクキルに見せた。

「勿忘草……私を忘れないで」

「うん、忘歌。お姉ちゃんの事忘れない。この花に誓ったんだ」

もしかして、この子のお姉ちゃんって……。

「でね、お姉ちゃん、一番最近会った時に、ここで待っててって、言ってたの。だから、忘歌。此处で待ってる」

この子お姉ちゃんは、きっと死んでいるんだ。

クロツカスの花の言葉の様に、ここで待っている。

その少女に、クキルは哀れみさえも覚えた。

「ねえ、君は、このまま、ずっと待つつもりなの？」

「うん」

「ねえ、君は、此处で死ぬつもりなの？」

クキルは、忘歌に訊いた。

忘歌は、驚いた様に言った。

「あれえ〜？忘歌、そんな事考えてないよ。忘歌には、ちゃんとまだ会いたい人が居るんだから」

「会いたい人？」

「うん、前もね、君の様に、忘歌に声を掛けた人が居たの。その人は雪人って人だったんだ。優しい人だった。だから、その人にお礼とかを言うまでは、忘歌、死ねないよ」

「雪人……」

クキルは、結構あの人も色々な事に首突っ込んでるんだな〜と思っていた。

「……!」

クキルは、気配を感じた。
ブレイカーの気配を。

「どうしたの?」

「いや……、ちょっと、僕は用事があるから行って来る!」

「え?うん……」

忘歌を置いて、クキルはブレイカーの気配がした方へ行つた。

「……!」

「英樹、どうしたんだ?」

雪人は、様子が変わつた英樹を心配する。

「何だか……前、俺が閉じ込められた奴の気配が……!」

「英樹君!雪人君、英樹君、どうかしたの?」

「あ、少し、具合が悪いみたいなんだ、あと、ちょっと俺は別の仕事があるから、急いで行ってくる！」

「あ、雪人君！」

薔花苗は急いで店を出て行った雪人を呼ぶ。

だが、もう既に雪人はバイクで走って行った後だった。

「雪人！」

「クキル！」

クキルは、走って来た雪人に気付く。

クキルの目の前には、ブレイクモンスターが居た。

「雪人！これ！」

「ああ、分かった！」

雪人は、クキルからクロックベルトを受け取り、変身した。

「変身！」

そして、雪人は、ブレイクモンスターに向かって行った。

「雪人……」

「クキル！居た！ねえ、忘歌、何か感じたよ！忘歌、お姉ちゃん見

つけたよ！」

「忘歌！何してるの！」

クキルの傍に、忘歌が来た。

「危ないよ！忘歌」

「ううん、危なくない！クキルと、雪人が居てくれるもん！」

「忘歌……」

壊れたように忘歌はクキルと雪人に執着する。

「クキル！忘歌、忘歌ね！」

笑いながら、忘歌は涙を流す。

「お姉ちゃんが、死んだって、知ったんだよ！」

彼女が、壊れたように笑っている理由、それは、大好きな姉の死を改めて知ったからだだった。

続く

4話「哀、恋、姉探しの少女」(後書き)

ララ「忘歌ちゃん」

忘歌「ララちゃん」

カズマ「何あれ、二人は知り合い？」

ルル「というより・・・オリジナル、僕達の元になったキャラクタ
ーが知り合い」

ララ「ほぼ設定変わってないけどね」

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」(前書き)

カズマ「忘歌の死亡フラグが……」

雪人「ああ……」

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」

「クキル！忘歌を何処かに連れて行ってやれ！コイツは俺がやるから、お前は安心して忘歌を守れ！」

「わ、分かった！忘歌、行こう！」

クキルは雪人の言うとおりに、忘歌の手を取り、そのまま逃げ出した。

「さて・・・コイツは、どうやってやるうか・・・」

残された雪人は、目の前のブレイクモンスターを見据える。

「クキル、何処行くの？」

忘歌はクキルに尋ねる。

「危なくない場所！雪人に言われたの！」

クキルは、少し慌てた様子で忘歌に言う。
クキルが走っていると、薔花苗が居た。

「あ、ねえ君！」

「な、何ですか？」

花苗はクキルを引き止める。

「ねえ、さつきひろひよろした、バイクに乗った男の人見なかった？下樹^{しもき}雪人^{しゆじん}っていう人なんだけど・・・」

「あ、雪人はちょっと別の仕事はいつたみたいです」

クキルは花苗の問いに答える。

「君、雪人君の事知ってるの？」

「はい。あのあなたは・・・」

花苗は、クキルの後ろに居る忘歌を見つけて、こう言った。

「あ、音無さんの妹さん……。まあ、とにかく、この中は安全だから、この中に入って」

「わ、分かりました・・・」

クキルは、花苗に言われたとおりに、店の中に入る。

「今は街で意味不明の怪物が暴れてるって話だから、店も緊急閉店してるの」

花苗は現状をクキルに説明する。

「従業員も、一人抜け出してって、一人は倒れてるの。片方は今、仮眠室で休んでるわ」

「あの、貴方が、蕾さんですよね？」

クキルは花苗に尋ねる。

花苗は、クキルの質問に答える。

「ええ、雪人君から聞いたの？」

「はい。とりあえず、蕾さんは、この子の事知ってそうですが……」

クキルは、忘歌を見ながら言った。

花苗は、少し難しい顔をして、言った。

「ええ、あの子の死んだお姉さんと同じクラスだったの。雪人君も、英樹君も、知ってるのよ。尤も、雪人君の方が忘歌ちゃんと直接遊んでたりしてたの。哀歌ちゃんは、雪人君の事が好きだったの」

「そうだったんですか……」

「お姉ちゃん、死んじゃったんだ。忘歌遺して……」

忘歌は、ずっと泣いていたのか、目の下あたりを赤く腫らしていた。そして、乾いた笑みで、壊れたように倒れる。

「忘歌！」

「忘歌ちゃん……！」

忘歌は、限界だったのだ。

姉の死んだその日から、ずっと寒い所で姉の帰りを待っていたのだ

から。

「くそっ！」

雪人は、クロッカーについていた機能を駆使して戦っている。

「結界の結晶！これで、街に被害は行かないはず・・・」

このまま街で戦うのは駄目だと感知した雪人は、街や人に被害が行かないよう結界を張った。

「このまま戦っても、体力を消耗するだけか・・・これは・・・」

雪人が引いたのは、赤い薔薇の結晶。

弓矢型の攻撃用の結晶だ。

「赤い薔薇の花言葉は『私を射止めて』・・・成る程な、だから弓矢なのか」

雪人は、赤い薔薇の結晶を使って、剣を弓矢に変形させる。

「さあ・・・いつでも来い！」

雪人は、弓矢を構える。

「弓道の経験は無いけど・・・大体は出来る！」

ターゲットに矢の先を固定し、矢を放つ。

「くっ……なかなかあたってはくれないな……」

雪人は矢を放つていくが、中々その矢は当たらない。ブレイクモンスターはどんどん雪人に迫っていく。

「何か、別の物は無いのか!？」

結晶を探すものの、中々攻撃系の物は見つからない。

「このフォームで行くしかないか……」

雪人は決心をして、弓矢で相手を叩いた。

「これでも、くらっとけ!」

雪人は何本も束ねた矢をくらわせた。

ブレイクモンスターにそれは当たり、ブレイクモンスターは消滅した。

そして、そこに残った人は……。

「この人……」

続く

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」(後書き)

剣崎「今回は、俺達が次回予告の係りだ」

城戸「係りとかあったのか!？」

剣崎「次回は、今回のブレイクモンスターの中に入っていた人物が明確になる」

天道「そして、忘歌はどうなるのか、まあ、俺には関係ないが」

城戸「天道お前は黙れ!」

剣崎「城戸、お前の方が黙ったほうが良いぞ、じゃあ、次回の楽しみにな」

城戸「ボソッ(でもあまり楽しみにしないほうが良いぞ)」

天道「城戸、聞こえてるぞ」

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」(前書き)

翔太郎「今回は俺達があらすじを任された」

フィリップ「前回は忘歌という少女が、クキルと一緒に薔花苗の経営してる店に逃げた」

映司「それにしても・・・英樹さんはどうなったんだろう・・・？」

弦太郎「うっっ！これからどなるのか、俺もワクワクするぜ！」

アंक「おいお前ら、ブレイクモンスターとやらに入っていた人物の謎については・・・まあいいか。映司、アイスクレ」

映司「どうでもよくないだろ！あと、アイスはこれ終わってからアंक「チッ」

映司「そうするとあげないよ・・・」

翔太郎「ま、今回は、新しい仮面ライダーも出るみたいだな」

フィリップ「今のところ伏線があったのは・・・」

翔太郎「それは今からの楽しみだ」

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」

「この人は・・・」

雪人がブレイクモンスターを倒した後に、中に閉じ込められていたのは、死んだと思われた忘歌の姉、哀歌だったが、その顔は白く、呼吸もしていなかった事から、もうすでに死んでいるだろう。

「何で・・・何で、死んだ人間が・・・」

雪人は、絶句した。

死んだ人間でさえも、その怪物の餌食になると分かったからだ。そうであれば、放置されている死体にさえも、ブレイクモンスターが這い寄る可能性があるかもしれないのだ。

その時、雪人は上の方から悪寒がして、上を見上げた。

其処には、以前英樹をブレイクモンスターの器にしていた二人が居た。

「見つかったやつたみたいだよ。コトト」

「あれ？残念」

「残念・・・じゃねえ！何だよ！これは！」

雪人は二人に問いかける。

二人は、そんな事も分からないのか、という風に言う。

「何って・・・」人間だった何か”を使っただけだよ？十分器には

足りてたからね」

アレクは言った。

雪人は、これでも生きてた人間なのに……！と、人間の考えを持つてない奴等に苛立った。

彼等は、人間ではないという事は、雪人もすでに分かっている事だが。

「くそっ！この人は、アイツの姉なんだよ！死んでても、大切な家族だったんだ！それを利用するって……何もんなんだよ！あんたら！」

雪人は、怒りを彼らにぶつける。

「何者って？決まってるじゃん」

「僕らは、ブレイカー。破壊する事だけが、生きる目的さ」

「だから、あんたらは、人間だったのか、どうかだよ！」

雪人は、さらに苛立って言う。

「それは、君の想像に任せるよ。僕達も、そうそうずっとは此処に居る必要は無いんで、じゃあね。クロツカーの少年」

そう言って、二人は消えた。

雪人は、哀歌の亡骸を、見つめて、一粒、涙を流した。

「ふうん、それで、クキル君は雪人君の家に住んでるのね」

一方、忘歌とクキルは、花苗かなえの店に居た。

英樹ひできも、調子が良くなったらしく、出てきていた。

「それにしても、英樹君、どうしたの？さっき、倒れちゃったけど・・・力の誤作動？」

花苗は英樹を心配した。

「ああ、その類たぐいかもな・・・。凄まじい悪寒を感じたんだ。雪人が行ったおかげで、少し引いたけどな」

「雪人君が？」

英樹はしまった・・・と思った。

花苗は、この一連の事件を知らない。

彼女に最初からちゃんと話すか、誤魔化すかしないと、駄目だ。

「あ、えつと・・・」

困った英樹はクキルに助けを求める。

（クキル！お願いだ！）

（ええ〜！？）

「えつと・・・これはね、最初からちゃんと話すから、聞いてて。花苗さん。あと、忘歌ちゃんも」

「うん」

「分かったの」

クキルは、ブレイカーの事、ブレイクモンスターの事を知っている限りすべて話した。

雪人の変身する、仮面ライダークロツカーの事も。

「成る程・・・クロツカー・・・もしかして！」

花苗は、何かを思い出したかのように、店の奥の方に行った。

「これ」

花苗が取り出したのは、クロツカスの紋章の入った結晶だった。

「これは・・・何？」

クキルは花苗の出した結晶をまじまじと見つめる。

「これはね、昔、雪人君の弟から貰った物なの」

「雪人の弟？」

「雪人に弟って居たの？」

クキルと忘歌は訊く。

クキルは疑問に思った。雪人には、妹が居たとは聞いていたが、弟が居たなんて聞いてなかったからだ。

それは、英樹も同じらしく、考えるようにうつん……とうなる。

「これは、雪人君も忘れてる事だから……」

花苗は、悲しそうに話す。

昔、雪人君には、弟が居たの。

下樹利久人しもきりくとっていう、一つ年下の弟が。

私は、雪人君とは、小さい頃からの付き合いだから、彼の事は覚えていたの。

利久人君が居なくなっただのは、英樹君が転校してくる前……丁度一ヶ月前だったの。

「利久人〜、利久人〜」

雪人君は、利久人君と一緒にかくれんぼしてたの。

私も、一緒になってやってたわ。

「兄ちゃん！僕は此処だよ！ほらほら〜」

利久人君は、かくれんぼをすると、いつも自分の居場所を言っちゃうの。

だから、いつも利久人君は鬼になってばかりだったの。

この事件は、利久人君がかくれんぼの鬼になって私や雪人君を探してたの。

「兄ちゃん〜花苗姉ちゃん〜」

「（利久人、まだこつちに気付いてないみたいだぜ。花苗、どうするか？）」

「（うゝん、どうする？雪人君）」

「どこいったんだろ・・・だから、僕にはかくれんぼなんか向いてないって、言ったのに・・・」

「（ねえ、雪人君、もうそろそろ可哀相になってきちゃったんだけど・・・）」

「（だな、もうそろそろ出て行こうぜ）」

そうして、私と雪人君は、わざと利久人君に見つかりに行ったの。

その時

「うわっ！」

「きゃっ！」

「兄ちゃん！花苗姉ちゃん！」

突風が私と雪人君を飛ばしたの。

そして、雪人君は、頭を強打。私は、なんとか近くの木に掴まって平気だったの。

「だ・・・誰？」

利久人君の前に現れたのは、黒いマントを被った青年だった。

『お前は・・・何かを壊したいか？』

青年は、利久人に問いかけたの。まるで、利久人君の中にある破壊衝動を大きくするように。

「うわ・・・うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

「利久人君！」

『邪魔者が入ったか・・・まあいい、こいつは、もう破壊人形だ。この事を知っている人間は、誰も居ない、居なくていいからな』

青年はそう言って消えた。私は怖かった。

私は一目散に利久人君の所へ向かった。

「利久人君！大丈夫・・・？」

「だい・・・じょう・・・ぶ・・・でも・・・頭が・・・痛い・・・花苗・・・姉ちゃん・・・これ、持ってて・・・兄ちゃんに・・・いつか・・・渡して・・・誰かが・・・そう・・・言ってる・・・気が・・・」

そう言って、利久人君の手は崩れ落ちたの。

「利久人君！利久人君！！！！！！」

そして、利久人君の姿は、青い光に包まれて消えた。

一瞬の出来事だった。

それ以来、雪人君も頭を打った衝撃で利久人君の事を忘れて、まだ幼かった雪良ちゃんせつらは、利久人君の事を覚えていなかった。

両親も、利久人君を、覚えていなかった。

「何だよ・・・それ・・・。誰も、誰もそいつを知ってる奴が、居なくなつたのかよ！」

英樹は、その事に叫ぶ。

クキルも、悲しみを隠せない。

「確かに・・・それは・・・無いよ・・・」

「悲しいの・・・家族を忘れるのは・・・悲しいの・・・。忘れる方も、忘れられる方も・・・」

「これは、利久人君が消える直前に、私に渡したの。クロッカスの結晶」

クキルは、それはクロッカーの本来の力を開放する結晶だと気付いた。

だが、彼は気になった、何故、その雪人の弟が、この結晶を持っていたのか、偶然拾ったのだろうか？
当然、クキルには分からない。

「ただいま・・・」

雪人が帰ってきた。

「雪人！」

「雪人君！大丈夫なの？」

雪人は、疲労してる様だった。

「多分・・・クキル・・・其処に居たのか・・・忘歌ちゃんも・・・」

雪人は、誰かを背負っていた。

「この人って・・・！」

「お姉ちゃん！」

雪人が背負っていたのは、忘歌の姉、哀歌の亡骸だった。

「死んでる・・・」

「ブレイクモンスターの器にされてたんだよ。死んだ後・・・」

雪人は言いたくなさそうに言った。

「そんな・・・」

花苗は落胆する。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん・・・」

「葬儀を、頼む」

雪人は、そう言って仮眠室に行った。

「あゝあ、まさか、クロッカーの弟について、知ってるのが居たとはね……」

アレクはつまらなそうに言った。

「でも、そいつは自分の弟について、忘れてるんじゃない？」

コトトは言った。

その部屋の奥には、ベッドに少年が寝ている。

「あ、目が覚めたみたいね、ハロー。調子はどう？」

ベッドに寝ていた少年は、目を覚ます。

話しかけられた少年は

「別に……」

と返す。

「絡み辛い人ね……」

アレクは言う。

「アレクは、もう少し絡みづらくしたら？アレクは絡みやすすぎて人間の社会に入るのも、すぐにしちゃうし」

コトトは、アレクに少し冷たい言葉を言う。

「はいはい、ねえ、次のターゲットは？」

「この、井のみなぎ間野水木って人間はどう？クロッカーの友達みただけど」

「いいね、それ。じゃあ、僕だけが行くよ、シカテは、まだ調整中だしね」

「分かった・・・」

そう言って、コトトの姿は消えた。

間野水木。雪人と花苗と英樹の友達だ。

彼もF・Tで働いている（今回の事件の時は休みだった）。

「大丈夫かな？雪人と英樹と花苗さん。この事件の場所って・・・

F・Tがある所だよね・・・？」

ニュースに不安を持ちつつも・・・水木はぼうっとしていた。

「少し心配だから・・・外に出ようかな・・・」

しばらくして、やはり三人の事が気になった水木は、家を後にして、外に出た。

「え？じゃ、じゃあ、これ、持って行って！」

花苗は、雪人に先程の結晶を渡した。

「・・・分かった、クキル、行こう」

「分かった」

「俺も行く」

「英樹！？」

英樹の意外な申し出に、クキルと雪人は驚いた。

「長い付き合いだろう、俺もサポートするから、な」

「・・・ああ、分かった、蕾さん、忘歌ちゃんお願いします」

「分かりました・・・忘歌ちゃん、私と一緒に待つの、良い？」

「うん！」

そうして、三人はF・Tを後にした。

「何だよこれ・・・」

「どうしたんだ？英樹」

その場所に付いた途端、驚愕の表情を見せる英樹に、雪人は尋ねる。

「あれから、水木の気配がしやがる」

「ええっ!？」

「雪人と英樹の知り合い？」

クキルは尋ねる。

「知り合いも何も、同じ仕事仲間だ。まさか、あいつもブレイクモンスターにさせられるとはな・・・」

英樹は唸る。

その時

「英樹!これ!」

「うおっ、これは・・・」

クキルが英樹に時計のような物を渡す。

それは、勿忘草の紋章が彫られた時計だった。

「英樹は、それに適合してる!」

「そうか・・・雪人、行くぞ」

「ああ」

クロッカーと・・・新たなライダー、レナツカー。

二人は、クロツクベルトを腰に巻き、変身した。

「変身！...！」

続く

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」(後書き)

ララ「いや、まさか英樹君がレナツカーだったとは」

ルル「ちなみに、名前の由来」

下樹雪人・・・特になし

薔花苗・・・花屋を経営してるから花関連の名前

桜木英樹・・・春をモチーフにしたキャラクター。春の花といえば
桜。エイプリル
えい 英 英樹。

間野水木・・・夏をモチーフにしたキャラ。サマー サマ まさ
まさの 真野 間野。夏といえばプール 水 水木

クロツカー クロツカスと時計^{クロック}

レナツカー わすれなくさと時計^{クロック}

ララ「主人公の由来」

7話「新感覚、初戦闘、水木の破壊衝動」(前書き)

カズマ「今回は短めです」

シンジ「作者曰くネタと時間が無いそうだ」

7話「新感覚、初戦闘、水木の破壊衝動」

「これが・・・レナツカー・・・。仮面ライダーの力か・・・」

英樹ひびは、感心しながら自分の体を見る。

雪人ゆきこも、英樹が変身できたのは意外だった様で、それをまじまじと見つめていた。

二人がそうしている間にも、ブレイクモンスターは迫ってくる。

それに気付いたクキルは、二人にそれを告げる。

「はいはい！感心するのは後で！今は水木って人を助けなきゃなんでしょ！」

「ああ、分かった」

「うん」

クキルの言葉に、二人は反応し、ブレイクモンスターに向かって行った。

まず、英樹はブレイクモンスターの足を得意の回し蹴りで蹴って体制を崩させ、その後ろから雪人が武器、クロックブレードで刺す。だが、ブレイクモンスターは後ろに居る雪人を殴り飛ばした。

「ぐああっ!!」

「雪人！ぐっ・・・」

雪人が飛ばされ、英樹は助けに行こうとするも、ブレイクモンスターが立ちほだかる。

英樹は、仕方なく応戦する事となった。

「どうすれば良いんだ!」

英樹は、どうしようもなくクキルに叫びながら尋ねる。

クキルは、英樹の言葉に、少し悩む。

「ええ………」

「早くしてくれ!うあっ!」

クキルが悩む横で、英樹は戦う。だが、今は英樹に武器が無い為、何も出来ない。格闘戦しかないのだ。

雪人に助けを求めたいが、生憎彼は気絶している。変身も解けているので、無防備だ。

その時、クキルがやっと言葉を発した。

「ああ!」

「クキル!何か思いついたか!」

英樹は、クキルが何か思いついた事に気付き、早速尋ねる。

「うん!英樹の力を使えば良い話だよ!」

「ああ!」

クキルの言葉に、英樹は納得する。それにしても、英樹が一番に思いついたであろうが……。

「なら、早速使っぜ・・・はあああああ・・・！」

英樹は、手に力を集中させ、気流を発生させる。

そして、英樹はブレイクモンスターを見据え、ブレイクモンスターに向かって手を振り上げる。

その時・・・ブレイクモンスターは宙に舞い上がった。

「えっと・・・そういえば、前に雪人はこれを使ってたな。使ってみるか」

ブレイクモンスターを宙に浮かせたまま、英樹はクロックベルトについてる何かを探索し始める。

そして、英樹は何かを見つけたようだ。

「あ！」

英樹は、ボウガンを見つけたのだ。先には、赤い薔薇の結晶が付いている。

英樹は、急いでボウガンの先をブレイクモンスターに構える。

「よし・・・！発射！」

ブレイクモンスター目掛けて放たれた攻撃は、ブレイクモンスターに当たり、爆発した。

その後には、雪人と英樹、二人の友人である、水木が倒れていた。

「ふう・・・ありがとな、クキル」

英樹は、変身を解いて、クキルに言った。

クキルは、呆れながらも英樹に言う。

「いや・・・自分の力を使っつて気付かなかつた英樹も英樹だけどね・・・」

「ははは・・・」

英樹は、水木と雪人を抱えて、花苗の居るF・Tに向かった。
クキルは、男性二人を軽々と抱える英樹を見て、呆然と呟いた。

「英樹つて・・・一体・・・」

もう分かっているつもりなのだが、クキルは少々英樹が何者なのか気になってくる。

続く

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」(前書き)

雪人「前回の仮面ライダークロッカーは…えっと…」

忘歌「水木が助けられたの！」

クキル「英樹って…怪力なんだね…」

雪人「え？え？」

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」

「ふう…」

先程の戦いの後、英樹は気絶している雪人と水木を背負ってクキルと共に花苗かなえと忘歌ぼうかの待っているF・Tフラワー・チームに行っていた。

「英樹つて…力もちなんだねえ…」

クキルは成人男性二人（と言っても2人共平均よりは小さい方なのだが）を抱えている英樹に向かって言う。

「まあな。生まれ持った能力と共に怪力も授かっちゃまったかもな」

英樹はクキルの言葉に笑顔でおどけて言う。

「何か…ごめん」

クキルは、生まれ持った能力の影響という言葉聞いて何か悪い事を聞いた気分になって、思わず謝っていた。

「良いんだよ。俺ももう慣れちゃったし。それにな、雪人は俺の力を間近で見せてさ、俺がアイツを突き放した時、なんて言ったと思うか？」

英樹の言葉に、クキルは考えて考えて「分からない」と言った。クキルの返事を聞いた英樹は、こう言った。

「あいつが言った言葉はな、神様はきつと、英樹にその能力で皆を

幸せにしてほしいんだよ。なら、その能力でしか出来ない事を英樹がすれば良いんじゃないのかな』ってさ。あいつ結構天然なんだよな…純粹でさ、人より観点が違うんだよな…。それが雪人らしさなんだよ」

英樹の言葉は、とてもクキルには分かった。

突然変身してと言われて変身して少し驚くくらいだし、生活危ないのに身元の分からないクキルを家に迎えたり…。彼の行動は普通の人間には出来ない。ただの単純な馬鹿なのかもしれないが、彼はとても優しい人間だ。

クキルは、今までの雪人の行動で気になった事を英樹に話してみる事とした。

「そついえばさ、英樹。今までの雪人の行動で気になった事があるんだけど…」

「何だ？」

クキルの言葉に英樹は返事を返す。

「あのさ…雪人が最初に僕が英樹を見た時に中学の知り合いって言ったんだけど…英樹って、小学生の時から雪人と知り合いなんだよね？」

「ああ…雪人は、記憶が曖昧になってきてるんだ。雪良せいらが死んだ時期も、本当はクリスマスだったんだが、雪人は春だったと勘違いしている。春に死んだのは花苗の弟なのに…」

「花苗の弟？」

初めて知った事に、クキルは頭に疑問符を浮かべる。

「ああ、花苗にも弟が居たんだ。雪良と同じ年の列花れっかっていう弟がな。ソイツも病弱でさ、俺達が高校に入学する前の春に死んだんだ…」

「結構、皆複雑な事情があるんだね…」

英樹の言葉にクキルはそう呟く。英樹は超能力保持者。雪人は妹を亡くし、弟は行方不明（弟の事は覚えてない）。花苗は弟を亡くしている。そんな話を聞けば誰だってそう思うだろう。

「で、話に戻るけどさ雪人は恐らく…花苗のしてた話、雪人の弟の利久りくと人が居なくなつた時に頭を強打したって言ってただろ、その影響かもしれないだよ。雪人が記憶を失くしやすいのはさ」

「…」

それっきり英樹とクキルは黙っていた。

何を話せば良いのか分からないし、何を話しても雪人の事情や記憶能力の話になつてしまう気がしたからだ。

黙って歩いて、F・Tについた。

「英樹君。クキル君。おかえり…ってどうしたの!？」

「雪人!」

花苗と忘歌は気絶している雪人と水木を見て驚いて、慌てて仮眠室に連れて行った。

「で、どうしたの？水木君まで…あれの餌食になったわけ？」

花苗は英樹とクキルにそう言った。その表情は悲しそうだった。クキルは一瞬話すのを躊躇ったが、それを話す事にした。

「ああ…。そして、俺もこれを受け取ったんだ」

そう言っつて英樹が出したのは勿忘草の模様の彫られた時計だった。花苗はそれを見て「成る程ね…」と呟いた。忘歌も英樹が仮面ライダーになった事が分かったみたいだ。

「それにしても…見境無いな…。まさか死んだ人間とかも使われるなんてな…」

英樹の言葉に、返事をする者が居た。

「もしかしたら…俺の知り合いばっか狙ってんのかもな…」

「雪人！まだ寝てなきゃ！」

「雪人君！」

雪人が仮眠室から出てきていたのだ。

それを見たクキルと花苗は雪人のもとへ駆け付けた。

「あれ？利久人…？花苗…」

そう言っつて、雪人はまた倒れた。

「雪人君！雪人君！」

「駄目だ…また気絶してる…」

花苗が倒れた雪人を揺さぶるも、彼は起きない。

英樹は、雪人が気絶している事に気付き、彼をまた仮眠室へ連れて行った。

「英樹君。有り難うね」

「いや、良いんだ…だが、さっき雪人が…」

「うん。利久人って言ったね。クキル君の事をそう呼んだね…」

英樹と花苗にとって少々疑問なのは先程の雪人の言葉…クキルを見て利久人と呼んだのだ。

「僕が…利久人？」

「ううん、それは無い筈。利久人君は今22歳のはずよ。こんな小さい筈が…」

花苗は其処まで言っ言葉を詰まらせた。

もしも、あの時のまま利久人が生きていたならば…。

利久人の存在を覚えている花苗も、利久人の容姿までは覚えていない為、似ているかどうかもあやふやだ。

だが…なら、何故先程雪人はクキルを利久人と呼んだのだろうか？

疑問は積もるばかりだった。

「僕は…何なの？」

クキルは、自分が何者なのか。其処が気になって仕方なかった。もしも、雪人の弟だったら？もしも、何でも無い物だったら？

もっと、知らなくてはならない。自分の事を、雪人の事を、全ての事を。

記憶の無いクキルには、そう考えるしかなかった。

続く

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」(後書き)

何か…フラグが浮上しました…。

剣崎「次回予告だウエイ！」

城戸「あれー俺の知ってる剣崎さんってこんなだったっけー」

乾「知らん。とりあえず、次回予告か…」

剣崎「今回は忘歌が活躍するウエイ！」

天道(壊れたな…剣崎…)

乾「…で、利久人って、結局何なんだ？」

城戸「いやいやいや…今からそれが明らかになっていくんだろ」

剣崎「でもさ、こんな序盤で明らかにして良いのか？」

全員「……………」

城戸「作者！もっと細かい話！こんな序盤で全部明らかにしたら駄目だ！」

剣崎「作者、まあがんばらうえーい」

城戸「本当に大丈夫か剣崎さん！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459z/>

仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

2011年12月29日15時45分発行